
去った日常

羅針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去った日常

【Nコード】

N8596Z

【作者名】

羅針

【あらすじ】

ある研究所で、100体の能力者が製造された。その大量の能力者をめぐるお話（1章）

1・出会い

「うーさみい」

今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持ってない暦17年。

名前を古見^{こみぞん}在という。古見 存。

基本、コミゾンと呼ばれている。

眼は黒、少し赤みがかかっている。髪は白。銀髪のほうがあっている表現だ。

銀髪はロングヘアで肩よりちょっと長いくらい。たまに女の子と間違えられるほどの容姿。

容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放っておくわけではないのだが、モテない。

クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買いに行くとなると億劫になる。

そう、クリスマスツリーのまわりにはカップルどもがうじゃうじゃいやがるのだ。

（ひっそりとしているよ！）

心の底で大声を放ち、空を見る

空を雲が覆っていた。

（一雨きそうだな…… それまでにご飯買っておこう……）
ハ口。ズまで走る。

「ん」

背伸びをした。ハ。ーズの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立ち上がり背伸び。

カツサンド3パック、ハム Mayo サンド6つ、200g程度の弁当30個。

「足りねえな……」

胃袋をどこに持って行ったのだろう。

この世界には特殊な力を持った人物が、10人いる。

一人は、電撃

一人は、火炎

といった風に、要は超能力^{サイ}だ。P S I^{サイ}を使えるだけで、威張れるのだ。

コミゾンにはこれといったP S Iは無い。

P S Iは、

「99%の才能と1%の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。

コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。

何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。

帰り道に超能力とか大好きな青年が思い返す。

今のところの夢は能力が使えるようになる

「何かいいこと起きねえかな……」

夜空を見上げる。いやな予感がする。

ポツポツと雨が降り始めた。

(やっぱりかあ)

帰ろ、と言つて地面を見たその時、一言だけこう聞こえた

「危ない」

「は？」

上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。

「うわわわわ」

お姫様抱っこで救出

「邪魔」

ヒョイツと腕から逃れると、その少女は空を見上げた

「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」

「は？」

キュルルルと回転する矢がコミゾン目掛けて発射された。

キュイイーン！

その矢は兆弾され、打った男へ戻っていく

「邪魔をするな」

「一般人を巻き込むな」

バチバチと火花を散らす二人。男は未だに宙に浮いている。

サイキツカーか？

少女は手を前にやると「衝撃^{ブレイク}」と言った。

次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。

コミゾンは腰が抜けて立てなかったが、何とか逃げた。

2・翌朝

起きた。朝になったので起きる。

「なんだったんだ昨日は？」

独り言をブツブツつぶやいている「ミミゾン」。

「……うにゅ」

「……」

（何も見てない聞いてない。）

地面では昨日であつた少女（だと思つ）が寝転んで熟睡していた。

「さ！朝御飯食つて学校行こう！」

「……私も」

「……」

場が沈黙する。

「返事は？」

「……」

「返事は？」

「いや……その……」

「返事は？つて聞いてんの」

「はい。スミマセン」

「よろしい」

「……」

こいつ……中1くらいか？

「何歳？」

「19」

「……嘘だろ？」

バツ！つと食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。

「馬鹿にしたな？」

「スミマセン！」

「よろしい♪」

「……」

「ふーん♪ふーん♪」

出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女（でも年上）

「なんでここに來たの？」

年上だったとは……

「行くアテがないから」

「……」

（こんな爆弾娘、いらねー……）

「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく」

「あっそ……」

いつのまにか冷蔵庫の前に行って片っ端から口に詰め込んでいるこの少女（でも成人前）。

「名前は？」

「Q p o 1号」

「……は？」

「あんたには関係ないわよ。固有名はミナトだからそう呼んでくれて構わない」

あんたは？」

「古見 存」

「コミゾン？ 本名？それ」

「本名だよ」

「そっ」

「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にどっかいけよ」

「は？ あんたは私とこれからデートよ」

「……は？」

3・12月25日 <AM>

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻する!」

「やゝだぁ デートデートお」

「何で、俺に、そこまで、固執するんだ?」

「始めて一緒に寝た人だから(ポツ)」

「誤解を招く発言は止めろ」

「いこーよ 25日にもなって学校なんておかしいよお」

「補修だ」

「頭いいのに?」

「テストはまともに……? なんで知ってんの?」

「貴方のことなら何でも」

「俺の名前知らなかったよな」

「あの時はあのとときだよ」

「キャラ変わってるよな? 絶対。」

「あゝ もう! 補修行がなかったらマジで落第なんだよ!」

「いいじゃん。」

「よくねえよ! お前も早く帰れよ!」

「いーやーだぁ」

「年上の癖に駄々こねるな」

「デートしたいもん」

「(なんだこいつ)」

「わかった。帰ったら行ってやるから」

「本当!?!」

「ああ。うん」

「パアッと顔を輝かせ、笑顔で返答する。」

「ミナトは眼は黄色で釣り眼。」

「髪は澄んだ透明感がある水色(本当に透明なわけではない)の長めのショートヘア。」

寝起きはボサボサだった……

性格はコロコロ変わるからよく分からん。

俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

4・12月25日 <PM>

補習授業が終わり、学校を出て、腕時計を覗く。

「6：20分。」

流石にどこかへ行こうとは言い出さないだろう。

学校の門をくぐり、近くの信号まで来ると、コミゾンは見張った。

「……ミナト？ ミナト！？」

信号の反対側でミナトが腹から血を出して倒れていた。周りの通行人（野次馬）が
とやかく言っているが、人ごみを掻き分け、ミナトの元に辿り着いた。

「あれ……？ コミゾン？」

「おまつ！ 何してんだ？」

「心配……してくれてるの？」

「当たり前だろ！」

「えへへ……つと……」

普通に立ち上がると歩き出した。

「お前大丈夫なのか？」

「平気だよ。これくらいなら。」

銃で撃たれたような傷痕が5、6カ所あるのに……無事？

んなやけあるかあ！

「おい！ 病院に行かなくてもいいのか？」

「うーん……病院じゃ、傷、治らないし。」

もう今日は帰るね」

「……」

じゃっ　つと行って走って帰ったミナト。

普通、平気じゃないだろ？

ってというか帰れるならなんですつとここで寝転んでいたんだ？

本当、なんだっただろう？

5・12月25日 <PM>

家に着いたのが8:40。遅くなった……

なんだか家に帰りたくなくて遠回りしてきた。

絶対無事じゃないよな。あれ。

「あゝ 気になる」

誰にも届かない心配を放つてみる。

その時家のチャイムが鳴った。

「……」

なんだか出たくねえな……まあいいか

「はい」

「こんばんわ」

「……ミナト？」

どうせこんな展開かと思ってたけどな。

「私はミナトではない。」

「だって！見た目とか同じじゃん！」

「私はQp o 10号。固有名ナギサ」

「はあ……」

納得した振りをしておく。

「今日一日泊めてくれ」

「はいはい」

なにこいつら……口調が違うからいいけどさ。容姿同じじゃん！

「んで？今日帰るとか言っただけだった？」

「それはミナト。」

「そういう問題だよ」

「私もあなたと話してみたかった」

「なんで昨日ミナトが泊まったのしってたの？」

「Qp o 系統は研究所と思考がリンクしている。

それはQp o 全体で共有できる」

「そつか。で？何から話せばいい？」

「何から、というと？」

「お前は俺と話したくてここに来たんだろう？」

「分かりました。一つ相談したくて来ました。」

「内容は？」

「私たちQp oを守ってください。」

……私たち？

「何人いるの？」

あ……ノってしまった。

「全部で100体います。」

ある組織で作られ、世に放たれたのですが、
脳リンクが出来ることから2体以上捕まえて兵器として
使おうとする組織が後を立ちません。

なので、私たちをその組織から守ってください。」

「なんで俺なんだ？」

「あなたは世界で一番強い「力」を使いこなせるからです」

「……最弱の「テレキネシス」も使えないのに？」

「はい。」

「それじゃあ 使わせてみてくれよ」

「分かりました」

そう言っただけの腕をつかんだ。

次の瞬間、視界が一転した。

眼に見えたのは明るい部屋から暗く、機械だらけの廊下のようなところだ。

6・12月25日 <深夜>

「ここは？」

「研究所です」

PSI能力開発をしています。」

「ふーん」

至る所で機械が「ウィーン」と唸りをあげている。

「ここです」

「うわっ　すげえ」

相当な数のミナトやナギサがいた。

「全て固有名が在ります。覚えますか？」

「遠慮しておくよ」

「やあ　こんにちわ」

「あっ　こんにちわ」

研究所の博士みたいな人が握手を求めてきたので握手をした。
今ってこんばんわだよな？

「君が例のコミゾン君かい？」

「え？あ！はい」

「それじゃ、こっちに来てくれ」

「はい」

機会がいつそう多い部屋に来た。

「これをつけてくれ」

「なんですか、これ？」

「脳波を一定間隔で狂わす機械だ

君にはセンスはあるのに氣力がないと聞いた。

今は役目が出る。それを強く思い浮かべて」

護衛は決定なんだ……

「了解です」

あいつ等を守る……あいつ等を守る……あいつ等を

「グウ」

「よし」

俺は寝てしまったようだ

「ここは？」

「あ！おきたあ 今日補修ないんだよね？」

「うん。」

「私はミナトだよ！」

こいつ、初めて会った朝は性格怖かったけど……キャラチェンジ？

「そうか」

「私が能力発動まで指南することになってるから」

「オッケー」

「それじゃ、まずはねえ……ご飯作って！」

「……は？」

そこにはキッチンと冷蔵庫がある。

「私、ご飯作れなくて……」

「はいはい」

俺も腹減ったしな。

「私も食べる」

「あ！ナギサはだめ！」

「いいよいいよ」

「えーっ」

「ありがとう」

っていうかナギサ影薄いなあ 気付かなかった。

〓 1時間後〓

炊飯器がなかったからナベでご飯を炊いている。
神経がいる作業だ

「2時間後」

これで7回目の失敗だ

「3時間後」

米なくなってきたな

「4時間後」

もう何回目だろう

「お腹減ったよう」

「同じく」

「俺もだ」

「なんで炊けないの!？」

「んじゃお前がしろよ!？」

「……」

「今日はおかずにしようか……」

「うん……」

「分かりました」

年上ロリコン顔に囲まれてご飯を食べた。
これから、どんなことをするんだろう？

7・12月26日 <AM>

「無理無理、吐く！」

「逃げるなあ 特訓だああ」

フツ！つと目の前にナギサが現れる

ガシツ！つと腰を掴まれ身動きが取れなくなる

「しまった！」

「ナイスナギサ！ <炎バイル>」

「ちょ！ ま！ああああああ」

ゴアア つと炎に包まれて焼け死ぬ感覚を感じた。皮膚あちい！

「殺すきか！？」

「<引力アトラクション>覚える気あるの？」

「それを言うなら<反発力レプリション>よ」

「どっちでもいいのよ！ さあ 使いなさい」

「んな無茶な！」

「あんたなら出きる！さあ！ <炎バイル>」

「くそ！ <反発力レプリション>！ ぐあああああああ」

失敗。そろそろ死ねるんじゃないかな？

「こんの役立たず！」

「うつせえ なんのヒントも貰ってねえぞ！」

「それなら、先ず、炎を追い払うイメージと、QpOを守るという感覚を持つて」

「え？ ああ頑張る」

「ナギサあ 面白くないじゃん」

「今のままでは効率が悪い」

「知らないよそんなの」

Sめ

「さ！ <炎バイル>」

イメージ……イメージ……イメージ……きた！

「<反発力>!!」
レフリション

炎が方向を変え、ミナトに向かう、それをミナトはパイロキネシスを止めて回避

「やっと出来たわね」

「グア!? グアア」

脳が焼ける……

「ぐあああああああ!」

焼けるような痛み……なんだこれ……

「能力の反動ね。 博士呼んできて」

「了解」

フツ つとナギサが消え、次の瞬間、^{ヘアリング}博士を連れてその場に現れた。

「やはりこうなったか。 <治癒>」

ポアアアっという感覚が頭を撫でる。

徐々に頭の熱が冷えていく感じで痛みは去った。

「なんども力を使えば慣れると思うから、頑張ってみて」

「あ……はい」

8・12月26日 <PM>

以前に「特殊な能力者は10名いる」と言っただが厳密には間違いである

地球の人口を約6億人と考えて1/4、実に2億人の能力者が居る。日本には2300万人だっけか？

そして、能力レベルというのが存在する。

・レベル1 <物体移動・テレキネシス>

・レベル2<炎・パイロキネシス><電気・エレキネシス><液体・アクアキネシス>

<遠距離会話・テレパシー>

・レベル3 <治癒・ヘアリング><衝撃・ブレイク><瞬間移動・テレポート>

・レベル4<予知・プレゴニクシオン><千里眼・クレヤボアンス><精神読み取り・サイコメントリー>

・レベル5<重力・グラヴィテーション>

・レベル6<反発力・レプリシオン><引力・アトラクション>
その他

他にもいろいろあるのだが、大部分はこれだ。

そして、レベル5、6を使える人物が合わせて十名。

いろいろな重大機関に勤めているやつらがほとんどだがこの十名が世界のいろいろな基準を決めている。

・能力申請してない能力者が居た場合取り押さえ、罰則

・レベル4の一部とレベル5以上の者は年に一度必ず集会に集まる

・未成年が能力を使う場合、申請が必要である

他にも100も200もあるが、一部だけを提示して見た

俺は17歳だから……申請は？

「大丈夫、出ているわよ」

「！？ミナト？ナギサ？」

容姿はQPOの女の子が立っていた。

「私はQPO35号、能力は^{サイコメンター}精神読み取り」

少し読ませてもらったわよ」

「……んで？なんで出ているの？」

「博士が今日中には出来るだろうって、昨日から3日間の能力使用申請が出ているわよ」

「そりゃありがたいことで」

用意周到なんだな、この博士

「QPOっているんな能力使える人居るんだな」

今は休憩時間で研究所の外のベンチで缶コーヒーを飲命中。

あんまり美味しくないな……^{テレキネシス}

「そうよ。＜物体移動＞からレベル4の大部分まで。

美味しくないなら頂くわよ」

ひょいっと缶コーヒーを取られ、飲まれた。

こいつ、大人びてるんだな。

ここで研究が19年行われてるって事かな？

なんでこいつ等は19歳なんだろう？

「信じてたの？それ」

飲み終えた缶コーヒーを^{テレキネシス}＜物体移動＞でゴミ箱まで運ぶ

……名前聞いてないな。

「ああ 少な。」

「1号から順に年齢は若くなっている。私は18歳」
それでも年上……

「100号は8歳よ」

「ふうん」

「なんで二つの能力使えるの？」

常人にはきついと思うんだが。

「常人じゃないからよ。」

私たちが生まれた理由は《サイ・プレイヤー複数能力者》の育成。

私たちの脳リンクを普通の人につないで100種類使える人体兵器を作るのがここの研究所の裏の顔。

博士はいい人なんだけど……利用されてるっぽいの」

「つてことは、お前の能力は別のQPOも使えるつて事？」

「いや、今はオープン開放モードではないから。」

「んじゃ、なんで使えるんだ？」

「常人じゃないからよ……レベル1は全員使える

テレキネシス＜物体移動＞つて最弱つて言われてるけど

本当は使い勝手のいい能力なのよ」

「ふうん」

こいつでもないのか……

「なにが？」

「いちいち全部読み取るなよ」

「癖で……ま、私の役目は終わったから早く入ってきなさいよ。」

博士、呼んでるわよ」

「……早く言えよ。」

俺は立ち上がった。結構寒くなかったな、ここ

9・12月26日 <PM>

「なんすか？ 博士」

「うむ。 君の能力をPP（PSI Point）の制限なし使えるようにしたいと思う。」

この機械を頭につけてくれ」

「頭が痛くなつたのは……」

「PP許容値を超えてしまったからだ。」

PPはPSIを使うことで自然に増えていくのだが
君は常人の数千倍つて所か。」

どんだけだよ

「PPというのはサイポイントとか言っておるが本来は脳の容量を意味するんだ

PSIを使うことで脳は酷使されていく。

そして酷使の要領がオーバーしてしまうと、君みたいに頭が痛くなったり、

視界が悪くなったり。

やりすぎると死んでしまったり、体が動かなくなる」

「へー これからする、その機械は何を俺の脳に与えるんです？」

いやな予感がするんだよな

「脳に無理矢理能力をフル活用させる」

「は？」

スポ！つと頭に機械をはめさせられる

「大丈夫だ 治癒能力を使ってあげるから」

ウィーンと機械が鳴る。

脳に無理矢理干渉させられていく。

「ぐああああああああああああああああ」

俺は気絶してしまった

視点：？？？

「はあはあ」

私は現場へ急行してきた。

私の追ってはさっき潰した。長い戦いだった

Q p o 思考リンクでいろいろ入ってきたがこっちから向こうに流すのはNGだ。

現場は酷い有り様だった。

とんでもない重力で地球をへこませたような感じた。

地球上で何箇所もこの原因不明の超巨大クレーターが出没している。誰の仕業だろう？

これは……レベル7の問題になってくるわね……

視点：コミゾン

「はあはあ」

俺は手足を拘束されたまま脳が吹き飛ぶ感覚に耐えた。気絶から意識を覚醒させると思考は難しいほどだった。何を見ても感じないし首も動かない。

体感時間で5時間くらいしてなんとか動くようになったらそこは酷い有り様だった。

研究所はぐしゃぐしゃになっており、俺が居るところ以外は陥没していた。

「博士！？ 博士！！」

「ここまで能力が強いとは思わなかったよ
ま、研究所は粉碎だが、Q p o は全員無事。
私も何とか生き残ったよ」

「俺……が暴走しちまったって事ですか？」

「この機械が強制的にそうなるようにしたんだ」

「そう……ですか」

「博士！大丈夫？」

＜治癒＞^{ヘアリング}のQ p o 連れてきたけど……」

「大丈夫だ、ナギサ、メル！。」

ナギサはく瞬間移動テレポートかな

「そろそろこの拘束具、はずしてもらえませんか？」

このコミゾンは気付いていなかった。

10・12月27日 <AM>

「はぁ……」

研究所は大破、Q p oも結構な被害を受けた。

博士は両足複雑骨折（3日で治るって言ってた）

俺は無傷。

罪悪感が半端無い。

「そろそろ実戦の練習でもしておくかい？」

「博士……なんでこんなに大急ぎでP S Iトレーニングするんです？」

「……一刻も早くQ P Oを守って欲しいからね」

「なんで俺なんです？」

俺並みの能力なら他にも沢山いるでしょう」

「君だから、だよ」

答えになってないけど……

「君は出会ってしまった。Q p o 2号、アガサに」

「……まだ話したのはミナト、ナギサ、35号ですよ」

「君が一番最初にあつたのはミナトかい？」

「え……それじゃあ24日にあつたのはミナトじゃないんですか？」

「そうだ。あれがQ p oの裏切り者、アガサだ」

あいつ……そうか能力違うもんな。

大嘘つきやがって、行くアテがないとか言いやがって

「能力はレベル3でしたけど……？」

「レベルは関係ない。Q p oというのが肝なんだ」

「Q p oを操る……と？」

「そうだ 1号↓100号で上位置換がある。1号が発信した命令は絶対だ。」

2号から100号は従わなくてはならない。
だが1号が死んだら？」

2号が命令の司令塔となるわけだ。」

「だったら1号のミナトが帰って来いって命令すればいいじゃないですか」

「2号だけ、命令を無視しているんだ。その原因が分かれば苦勞しないんだが……」

「それで、2号から1号他を守るために俺を強くしていると……」

「それだけではない。2号を助け出したいんだ。」

「どこから？」

「ある組織が2号を仲間としている。」

2号はいいように利用されているだけだ。

おそらく命令の無視はその組織のプログラムだろう」

「その組織からも2号を守れと……」

「そうだ。」

「その組織は？」

「その内強襲してくるだろうさ。教えたら君はかちわりに行きそうだからね」

「仕事は早く終わらせたいんで……だるいですね……」

「とりあえず、実戦練習だ。レベル4相手でもいいかい？」

いきなりハードすぎません？

「いや……きついかと。」

「ま、レベル2といったところか」

「はい」

11・12月27日 <AM>

「んで？最初の相手はミナト？」

「悪い？」

「ま、始めましょうか」

「<炎バイルよ>」

俺は走ってかわす。

今回のルール

- ・俺は能力を<磁力マグニション>しか使ってはならない。
- ・一撃でも攻撃をあてたらミナトは勝ち

俺は三撃だ。

ハンデつきすぎだわ。

「<爆発ブローション>」

「<磁力マグニション>」

地面から砂鉄をひっぱって盾とする。

「やるじゃん」

「そっちこそ」

なんか……磁力で出来ることないかなあ

「<大火フレア・フレイク>」

「え？ あ、やば！」

「これで勝ち！！！」

「ちよ！ <大磁場マグネ・フィールド>」

ゴアアと磁力がこだけ狂う。

炎を動かすことは出来ないけど、さっき引っ張りだした砂鉄が凄い勢いで舞う

大量の砂鉄で一種の竜巻を起こす。炎を弱める

「！」

「<砂鉄槍マグネット・ランス>」

24日に襲われたときをイメージする。回転がかかってたな

ギョルルルルと炎を突き破ってミナトの頬を掠める。

「これで一撃だ！」

「……そう。」

なんか……キレたかな？

バトル
「戦闘モード」

「は？」

「やれやれ。ミナトは負けず嫌いだからなあ」

博士、冷静に説明しないで！

なんか怖い

ミクロ・フレア ミクロ・フレア
「<小火><小火>、、」

全然ミクロじゃねえ。最初に放った炎並だ！？

「やばいつてこれ！？ <磁力万力>」
マグネット・プレス

ミナトの周りに砂鉄を舞わせ一気に閉じ込める

これで二撃。

エクスプロージョン
「<大爆発>」

一気に砂鉄が吹き飛ぶ。ぶちぎれじゃああーりませんか

フレア・ブレイク
「<大火>」

さきほどの10倍程度の炎が俺を襲う。なんかいい案ないですか？

磁力……地球も磁力があるんだよな？

地球？惑星？

いろいろと考えをめぐらせる。

……これでいこう

マグネット・ボール
「<砂鉄球>」

真っ黒で不気味な玉がそこに出現する

「……！」

炎が俺を襲う

マグネ・フィールド
「<大磁場>」

球を操り炎の中に珠を入れる

マグネット・ボール
「<砂鉄球>を核にして、

マグネ・アトラクション
「<磁引力>」

そこに小さな惑星が出来る。炎が玉に自らぶつかり潰れていった。
うん、これ必殺技だ

一陣の風が吹く。俺とミナトの間に黒い玉が浮いたままだった。

「参りました」

「よし！」

ミナトが降参をして俺が勝った。

それからミナトが俺にそっけなくしたのは言うまでもない

12・12月27日 <AM>

俺の能力は<万有引力>。

引力、斥力（反発力）、磁力である。

俺がPSIを使うだけで地球の引力や万有引力が狂う。

俺の能力は大きいスケールで言うと、地球の働きを狂わすのだ。
悪い表現かな？

次は……？

「私よ」

「35号？」

「固有名はアキ」

「おっけー。」

レベル4じゃん。

「大丈夫よ、私はレベル4でも戦闘向きの能力じゃないから
でもハンデはなしよ」

「そうか……」

「<物体移動>
テレキネシス」

地面の石が持ち上げられ俺を襲う

「<反発力>
レプリシヨン」

360度<反発力>
レプリシヨンを行う

バシ！ 痛……

「！？」

「フッフ、あなたの考えていることはお見通しよ

あなたの<反発力>
レプリシヨンは1：1で空き時間が要る。

今、3秒使ったから3秒の開き時間が存在するわけだ。

その間に石を頬にぶつけただけよ」

「……そうか」

「今の自分を超えなさい

ちなみに二人とも5撃づつよ」

「おっけー マグネ・フィールド <大磁場>」

「その能力は1：2で空き時間ね、あなたの能力じゃ15秒が限度
終わったら30秒は何の能力も使えない」

前は4秒とか2秒とかにしておいたんだがな
同時に能力を使ったりしていたんだが。

磁場を利用して砂鉄を鋭利にしてアキに向かわせる
さっ さっ とかわす。

（そうか。俺の攻撃パターンを読んでいるのか）
「そろそろよ」

ふっ と磁場が消え、浮いていた砂鉄が落ちていく
「テレキネシス <物体移動>」

「くっ うっ！」

頑張ってかわすが動く方向まで読まれているんだ、2発も喰らって
しまった

（だったら……）

俺は考える。あいつの処理が間に合わないくらいの力をぶつけられ
いいじゃないか

「でも、それはあなたに出来ない」

「うっせー」

そんな力をぶつけたらアキは消し飛ぶだろうな

「さて。」

一陣の風が吹く

大量の浮いている石共をはさんで俺とアキが睨みあう

こいつは……結構強い相手だ

13・12月27日 <AM>

実力は均衡していた。

だが常に2手も3手も先を読まれて追い込まれてしまう。

何とか切り抜けても隙を突かれてしまう。

俺は4撃あいつは0撃のダメージだ

「あなたの負けよ」

アキが中傷にもにた笑みを浮かべる。こいつも結構腹黒い性格してんな。

「……」

（俺には負けしか残された道はないのか？）

何か……いい案は？……重力、引力、磁力、反発力……

……最後の一手だ

サン・アトラクション
「<陽光引力>」

太陽の光を捻じ曲げる。虫眼鏡のように紫外線をアキに集中させる。

「考えたわね <物体移動>」
テレキネシス

地面を持ち上げて紫外線に対する盾を作った。

「……」

太陽の光を俺の手に集中させる。

引力の力で手に留まらせる。

「……」

土が邪魔で<精神読み取り>が一瞬切れていたようだ
サイコメントリー

サン
「<太陽光 銃>」
ブレット

手をアキに向ける。引力の力を手からアキに一直線に放射集中していた小さな太陽はアキの頬を掠めて飛んでいった
研究所の瓦礫にぶつかる一気に溶けてなくなった

なんという熱量

アキの頬も焼け爛れてベリベリと剥がれていた

「……フフ。覚醒したわね

任務終了よ 降参」

「……？」

「あなたのセンスと力を引つ張り出すのが私の任務だったから」

「大丈夫かい？アキ。」

「大丈夫です ヘアリングをしてもらえれば幸いです」

「了解だ」

なんだかパンドラの箱を開けてしまった気がする

14・12月27日 <PM>

「アガサよ。今回の事件、どう思う？」

「レベル5以上の仕業だと思います。私の考察はレベル7の出現を考えるのが妥当かと」

「レベル7は私以外存在せぬ。レベル6で最近覚醒した奴等を探し、処分するのだ」

これだけの力は放っておけばレベル7にも覚醒しかけない。私たちの野望の敵となれば大きな損害になるだろう。

見つけ出して仲間にするのだ」

「承知しました」

面倒くさい仕事を頼まれた……

この大男はブルーム・ファンクス。地球上唯一のレベル7 PSI協会の上層部もそれを認めた超超能力者だ。

どのような力を操るのかは見たことがない。

「して、いつごろに搜索を始めればよろしいでしょうか？」

「31日、大晦日でよろう。見つかるまでは一般人を血祭りにあげろ」

「……承知しました」

逆らったら即死。一般人を巻き込むのはあまり好きではないのだが「それでは下がってよいぞ、アガサ」

「はっ！」

これから3日は休養だ

コミゾン君は順調に力をつけてきた。
レベル6を認められるほどに。

多種多様な応用力。諦めない精神力
バイタリテイ
そして、あの力。

このまま行けば、今存在する基本的な100種の能力者の弱点と攻

略法、

そして、強大な力をつけることが出来るだろう。

あの……ファングスの組織の幹部たちには敵うだろう

「博士！ 次は誰が？」

「ウム……一旦ご飯休憩にしようか」

「分かりました」

アキラキネシス
今く液体>の能力者と戦い終えた。

「……一旦ご飯休憩にしようか」

博士の声だ……腹へったあ

俺はおにぎり（Q p oの誰かが作ったおにぎり）を貰いに走った

15・12月31日 <AM>

【0:00】任務開始

ビルの最上階から飛び降りる

そして、能力を最大限に視界に入る人物に向ける

「がは!？」

「きゃあ」

一般人が苦しむのを見て心が痛む。

(関係ないのに……)

こんな私を止めて欲しい、助けて、とはもう言い飽きた。

どんなやつが私を助けに来ててもやられて重労働させられて罵声を浴びられ

精神が肉体をやられて死んでしまう。

そんなのもう見たくなかった。私は自我を出来るだけ心の深くに閉じ込めた

私の能力は2点、座標 α ・座標 β を設定。 α から β に向かう衝撃を起こす。

PPを込めた分だけ向かう力が大きくなる。

今は心臓のの前に α と β を作って衝撃、心臓が麻痺して死亡。

着地するときに足の裏に α 、着地点に β 。着地する寸前に弱めに発動。

軽くピョンつと飛んで自殺は免れる。

「てめー、何してんだ？」

追っ手か……めんどくさいなあ

能力者は常に体からPP放出しているから座標がものすごくぶれる。基本、私がトドメをさす。

私は裏手で小刀を手にとってその男と対峙した。

「コミゾン君、おきて!」

「んー？ 博士？ どうしたんです？」

「例のスクランブル交差点でやはり襲撃が起こった。
組織の幹部か、2号だ」

「行きます！」

例の、とかやはり、とは、前々から襲撃が起こるかもしれないと予測していた場所だ

もちろん、ブレイクセッション＜予知＞で出していた場所だ。

「よし、Q p oを適当に2、3人連れて行かせるから先に行つてい
てくれ」

「了解です」

（弱かったわね）

男はそこまで強くなかった。 サイコメトリ＜精神読み取り＞の使い手だったけど

テレキネシス＜物体移動＞も使えないんじゃない、能力の持ち腐れよ。

後ろを向くと、どこかで見た顔をした男がいた

「アガサ、帰るつもりはあるか？」

「なぜ私の名前を知っている？」

「ま、いろいろあつてな」

「帰れ、一般人であろう。殺したくない」

私は血まみれの剣を片手に脚に能力を込めた

「一般人じゃねえよ。お前に助けられた

次は俺が助ける番だ」

（そうか）

こいつは24日あたりで出会って巻き込みたくないと思って助けてしまつた奴か

「だったら去れ。それが今お前の出来る一番の行動だ」

「断固拒否する

俺はお前を守れ、助け出せ、と頼まれてるんでなあ

パパッ　と終わらせたんだ、帰るぞ」

「そんな気持ちで仕事をするな、死ぬぞ」

「殺せよ。それで前が博士の下に戻るなら

俺は喜んでこの身を投げ出そう」

「殺す、だが帰らない」

「そーかよ 全く。後悔するぞ」

「どっちの台詞だ」

ポケットに手を入れて気丈に話す奴がにくい。

あいつは6日前までは力を持っていなかった

いける。レベル5くらいでも使いこなせないはずだ。

「さてと、援軍来てないけど引きずってでも連れて帰るぞ」

「やってみる」

私は脚に能力を込めた。

「かてねーぞ」

16・12月31日 <AM>

「かてねーぞ」

自信はある。アイツの能力は衝撃。

一度見た。Q p oに同じ能力者は居ないが博士に弱点を教えてもらった。

弱点とは能力者に向けると座標がぶれるのだ。

「勝てるわよ」

直接俺を狙って衝撃を打つてくることはないだろう。

俺の能力は α 座標と β 座標を設定。

引力なら $\beta \downarrow \alpha \uparrow$

反発力なら $\alpha \downarrow \beta \downarrow$ (β が α のある方向と反対に動く)

θ の設定も出来るが上位的な能力に使う。

ゴオワ！つと地面が上に引き出される。

俺はそれに逆らわず、上空に飛ばされる

エア・アーチェリー
「<空気弓>」

俺の腹にとんでもない衝撃が入った。

「が……はあ」

上げられた上空から3, 4 mほど飛ばされ、俺は息をついた

「あなたがどんな能力かは知らないけど

熟練度では私が上。

動くな、オゾン層からあなたの背中を打ち抜くわよ」

蹲って腹を抱えている俺は上から狙われているようだ。

エア・アーチェリー
「<空気弓>は敵の前の空気に α

それに向かって打ち出したい方向と反対に β 。

衝撃で、空気が押し出され、衝撃が入る。

かわせたものは居ない。

完全に狙っていたなら確実にそこに当たる。

今は奴の背中に α 、オゾン層と同じほどの高さに β を置いている。

「てめえ、強いなあ……」

でもなあ……負けたくないんだよ……」

アイツの手には黒かむらさきか判別しにくい三角形が生み出されていた。

バースム・トライアングル
「＜真空三角形＞……！！」

「……ッ！く！」

エアー・アーチェリー
特大の＜空気弓＞を発射する

三角形に空気があたり、無に帰している。

「これは特別製でなあ…… α 、 β 、 θ でぐちゃぐちゃに引力働かせてんだ。」

空気が遠心力で出て行く。おかげで真空となり、あたったものは真空中で捻じ曲げられ、引力で捻じ曲げられ、遠心力で捻じ曲げられ、ものは混ざり、空気に四散するんだ。」

「……ッ！＜万有引力＞！」
ヒンゴ
「正解」

「うあああああ」

エアー・アーチェリー
彼の周りに10台の＜空気弓＞を設置。

一気に放射。

バースム・スクエア
「＜真空四角形＞」

彼の周りに先ほどの三角形と同じ色をしたものが現れる。

「攻撃は通じないぞ……」

……冷静になれ。今回の任務はレベル6の発掘。

ならばこいつがそうであろう。任務開始

「白旗を揚げる！」

「そうか。んじゃあ帰ろう。」

「さて、私たちの組織に入らないか？」

「断固拒否する。さ！帰るぞ」

腕を掴んで引つ張る。

「何をしている。」

「!？」

そこに組織の幹部、エネアリー魔幻視が立っていた

「てめえが組織のリーダーか？」

「答える義理はない」

17・12月31日 <AM>

「どこに連れて行くだよ！」

さつき現れた男がアガサに触れたとたんに10mほど先のほうに飛ばされた

思わず宙に浮いている腕をどけた。

でも違和感が残る。

向こうに連れて行かれて一瞬、感触が残っていた。

手を離していなければずっと触っていたかもしれない。

「私の名前はエネアリー、

君を撲滅しに来た。」

すると腕（手首から先）が飛んできた。

「うわあ!？」

バースム・トライアングル

<真空三角形>で腕を切る。

なんともない、これは……幻術

イマジン

「<幻術>！」

「違うんだな」

すると切れなかったはずの腕が俺の頬を殴りつけた。

「ぐっ」

リアル・ハシナトリ

「<現幻>だ」

聞いたことねえな

「しらねえよ！」

浮いている実際に殴った腕を切った。次も切れなかった。

「無理だ」

「ちっ」

睨みつけた。

「大丈夫!? コミゾン！」

アガサと同じ顔の少女が現れた。

見た目じゃ見分けがつかない

「アキだ」

「ナギサ」

なんとなく性格同じだな。よく話す奴を出してくれたんだな、博士

「その人は？アガサと誰？」

「エネアリーさんだつてよ」

「……」

もしかしたら……アキが居ればこの能力、攻略出来るかしんねえ

「アキ、ちよつといいかな」

「二人とも、何言つてるの？」

「ん？」

「ここには誰も居ないじゃない」

「何言つてるんだ？アキ」

「能力解いたら人は見えるけど能力中は誰も居ない。

何も発していない」

「……」

「……」

「よく見抜いた

だが、実在するものと実在しないものの区別はその女以外分らないだろう？」

「……」

アキにとって見えないといった男が声を発している。

そういうことだ？

「今は顔だけ存在してる！」

「は！？」

「消えた……」

あの幻術の中に実在させるものを選ぶのか？

簡単にまとめるとあれは分身で

腕だけ存在させることも顔だけ存在させることも出来る……と

アキにしか分からない区別だ。

どうする……やばい状況かも

17・12月31日 <AM> (後書き)

加筆しました

18・12月31日 <AM>

「本体はどこだ!? アキ、探してくれ」

「もうやってるわよ、ここに居る私たち以外には全然人居ないから分かると思うんだけど……」

「分かるかな?」

こんの男うつせえな

「フン!」

腕が5体から2個ずつ10個出された。

ヤバイ!

「く! <真空四角形>!
バースム・スクエア

3人を覆う大きな立方体を作りだした。

「無駄だ」

腕が中に入ってきた。PP因子のあるものは入れないんじゃないのか?

俺の固定観念か……

やはり実体のない幻術は消せないみたいだ

はっ　と我に帰るとこれはヤバイと思った。

殴られてこの壁にぶつかると死ぬじゃん!

腕が俺に触れる瞬間ナギサが俺に触れた。

次の瞬間、<真空四角形>の中から外に出ている
バースム・スクエア

「<万有引力者>に<精神読み取り者>に<瞬間移動者>か
グラヴィテーター サイコメントラ テレポーター

レアな能力者が勢ぞろいだ。流石Qp oと実験体」

「俺が実験体だと?」

「そうだろ? いろいろな機械を使わされたんじゃないのか?」

「くう」

「結局は最終兵器作成の踏み台さ。
サブプレーヤー

俺みたいな完全希少種みたいなのは作成されてないだろう」

完全希少種、突然変異でその固体にしか宿らない特殊能力

恐らく<幻術>の変形体か……^{イマジン}

「結局は貴様の能力は与えられた能力なんだよ！
一生その力に頼るんだな」

この感覚は何だ……別にこいつの口調がいやなわけじゃない
言われた言葉が気になったわけでもない……

「「博士を馬鹿にするなあ！」」

3人が一度に言葉を発した。同じ言葉だった。

このフツフツと沸き立つ感覚は……この怒りだけではない、
でもこの戦いのうちは忘れなければ。

「私、違う力が使えるかも……？」

「アキ？」

「なんだか……違う自分が居るみたい……」

「あなたもね……」

「ナギサ？」

この感覚は……

「貴様等、何を言っている」

「うあああ」

アキは手からなにやら緑の光線が出てきた

「無駄だ……」

「フフ……思い出したわ……Q p o 覚醒の条件」

「……！」

幻術が動こうとしたが遅かった、俺はこれはチャンスなのか？
とアキに目配りして、アキはうなずいた。

ナギサが俺に手も触れてないのに転送した

光線が当たると幻術は（俺にはわからなかったが）本物となった。

俺は風圧で作った刃を突き立てた。

ザックリ刺さった。本物のようだ。

心臓を貫いた。貫通して後ろから白く不透明な刃が見える。

俺がPPを消すと、その刃はなくなった。俺は吐いた。

「これが現実よ。」

いつの間にか後ろにアキが居た。

恐らくナギサに転送されたのだろう

アガサはこいつの能力で幻術↓実態で本拠地にでも送られたのだろう。

俺は急に頭が痛くなった。とてつもなく

「ぐあああああああああああ」

俺は気絶してしまった

19 〽番外編〽1月1日

〽注意〽

- ・これは本編とは関係ありません
- ・ストーリーは全く関係ありません
- ・本編とあわせると相当矛盾しています。
- ・しょうもないので飛ばしてもいいです
- ・正月編です。

〽本編始まり〽

「うゝ寒い」

今日は正月で初詣に行くところだ。

Q p o は誰も来ないのだ。一人でおみくじ引いて必勝祈願でも買おうかな……

視点：アガサ

「寒い……」

私は初詣に向かっていた。

理由はこうだ

「日本のくじと言う物を確保してくるのだ 一つのみ。

それが我が組織の士気を変えることになる」

ファンクス様直々の命令だから断るわけには行かない

私は神社に向かった。必勝祈願でも買ったら可愛らしいかしら？

視点：天の声

この神社は神直神社。今日は40近くの組織が集まる。

この日にとんでもない大暴動が起こるなど誰も知る由もなかった

視点：コミゾン

「ふう。おみくじでも引くか」

「おらあ」

そう言つて20人ほどの軍団がおみくじ箱を盗つた

「これはいただいでいく……ごはあ」

大ジャンプをくりだしていた20人ほどの軍団が叩き落された。

おみくじ箱に人が集る

俺も全力で引きに行った。

「うおおおお」

「ダメよ」

「ぐは……」

この感触は……

後ろを向いた

「<空気弓>、私が貰う」
エア・アチエリー

「俺も引く！つていうかそんな大技いちいち繰り出すな！」

俺はアガサと対峙した

ドガン！という爆発音と共に人は吹き飛んだ

「へへっ 俺が貰う」
エクス・プローラー

「<爆発者>か！」
ビンゴ

「正解」

「おいアガサ、アイツからおみくじ取り返すまで手を組もうぜ」

「利益はないと思うけどいいわよ」

そいつの周りに一気に人が集る。爆発で飛んでいく

「<光線>」
ビーム

知らないやつがおみくじをはじいた。

うおおおおおっと人がそとに集まる。

これは一種のデモか？

俺はαを俺の手、βをあの箱に向けた。

引力で俺の手に向かう。

すると手と箱の間に人が集まりPP因子が解かれた

「そんな解除方法があるなんて！！」（番外編のみです）

そこにキャッチした人は……ナギサ！？

次の瞬間消えた。

「やばい！どこ行った」

神社に居た人が「おおおおみいいいくうううじいいい」と出て行った

「ん？この暴動が町中に！？」

「もう私は知らないわよ」

はあっと帰るアガサ。

「お前もおみくじ要るんだろ？ここで待ってるよ。一個持ってくるよ」

「……？」

「待ってるって」

俺は走り出した

この日は（俺が入ったことで）自衛隊が出動するほどの暴動となった。

町にはありとあらゆる傷痕が残り、大損害となった。

クレーター（俺が発生源）が大量出沒。町は完全に陥没していた。

視点：アガサ

「持って参りました」

「ご苦労 あけるぞ、よいな？」

「どうぞ」

ペリペリっと（コミゾンがくれた）おみくじを開いた

そこには……「大凶」と書いてあった

その日ファンクス様は寝込んでしまった

視点：コミゾン

「さーて開けるかあ」

研究所にナギサがオミクジを配っていた

俺は……「大吉」だった！

今日の能力のキレはとてよかった

20・1月4日 <PM>

「んっ……？」

ここはどこだろう。

「起きたかね？コミゾン君」

「俺は……なんでこんなところで？」

ここは研究所だろうか。病室まで出来ているという事は俺が暴走したときの被害はもう完治と言ったところか。

「君の、新しい能力が覚醒したんだ。」

君は最初から<複数能力者>^{サイ・ブレイヤー}の素質があつた」

「……」

「研究所で発掘した<万有引力>と君が発掘した能力まだ分らないが二つの能力のキャパシティーが大きく、脳がパンクしたところか」

「どんな能力が覚醒したんでしょう？」

「まだ、分からない」

「両方俺の力なんですか？」

「ああ……<万有引力>のほうは外科的に引っ張り出したものだがね」

「そうですか……」

「今日は……空が白んでるから……1月1日の朝ですか？」

「もう日が変わっているよ」

「それじゃ……1月2日？」

「残念ながら4日だ」

「4日！？補修が！」

「まだ朝の7時だよ？」

「8時からです！」

ガバ！と起き上がる。俺は苦痛に顔を歪ませた
「っっ……」

「今日は休んでおきなさい。体が君の成長に追いついていない。」
「……」

「さてと、何かしたいことでもあるかい？」

「一つ、質問。アガサの組織はどうなっただんです？」

「まだ攻めてきているんですか？」

「今は活動の兆しは見えていない」

「そうですか……」

俺は足を地面につけた。少し高めのベッドから降りると
体中が軋むような痛みを感じたが、俺は無視をした

「どこに行く気かい？」

「1月4日は俺にとって大事な日なんです
行かせてもらいます」

「どこに？」

「墓場に」

俺は「ひいらぎ墓苑」に到着した

ここには俺の母さん、父さん、妹、兄貴が眠っている。

俺は花を墓石に向かって置いた。

手を合わせた。今日が家族の命日だ。

視点：アガサ

私は今日だけお休みを取って「ひいらぎ墓苑」にきた。

ここには私が殺してしまった一般人が数多く居る。

毎年1回だけはここに来ている。

一般人で殺してしまった人が居るお墓は片っ端から調べて花を手向
けている。

「……？」

あれは……あのときの……コミゾン？

私は近くの墓石に近づいて花束を置いた。

手を合わせて供養する

（殺してしまつてスミマセン）

団員の他の者はこんな事はしないのだが……私がおかしいのだろうか？

コミゾンは無視して他の墓石に向かった。

コミゾンは「古見」と書いてある墓石の前で泣いている。

大の大人が泣いているのを始めて見た。

視点：コミゾン

母さんにももう会えない

死んでしまったその20分前にケンカしてしまつたんだよな……

父さんは美味しいコーヒー屋を教えてくれると言つてくれたのに……

妹はモデルの仕事で15歳で働き始めて俺より高収入だったな

何回か奢つて貰ったこともあった。

兄貴は野球でプロチームに入団して、彼女も出来ていろいろなことが起こつて人生上手く行つていたんだよな……

全てが思い出だった。家族のことを想うとどこでも涙が溢れてくる。

俺はそこで20分くらい声をあげて泣いてしまった。

俺は涙で顔をクシャクシャにして立ち上がると

向こうのほうにアガサが居た。

ボーッと観察していると別の墓石に回つてまた手を合わせている
なんだか闘う気がおきずとりあえず話しかけてみた

「お前、何でそんなに多くの墓に手を合わせてるんだ？」

「うわ！？」

「お前、アガサだろ？」

「いや、あんた……まあいいや」

「今は、闘う気がおきなくてなあ……」

「ふーん……」

「んで？なんで？」

「昔、殺しちゃった人たちよ。

贖罪のつもりでね……」

「ふーん……」

俺は能力者に殺されたということでごを薦められたんだが……

「お前、あそこの人は殺してないよな？」

「あの……「古見」ってやつよね……私がやったやつよ」

「ふーん……は？」

「聞いてなかったの？巻き添えになっちゃって、本当はしたくなかったんだけど」

「……」

俺は復讐などしなれと思ってた。

だがこいつがこんなにさらっと言う事に憎悪と殺意が芽生えた

「復讐なんて考えてるんでしょう？」

殺してくれて構わないわよ」

ニマツ！つと微笑んだ

「……？」

「私は死んでもいい。

でも役に立てるなら生きているうちに何でもしたいと思うだけよ

出来るだけ殺さないようにしてるんだけど

ファンクス様の手下となった。関わってはいけなかったのよ。

逃げたら殺される」

「なんで死にたいと思うのか？」

「理由なく生まれたからよ。

実験として生まれて、実験として生活する

そんなの楽しくないじゃない

人間として生まれたなら人間としていろいろとしてみたかったのよ

その内、ファンクス様のしたいことが終われば帰るわよ」

そう言っで軽く笑ったアガサは「最後にっ」と言っで

俺がさっきまで跪いていた墓石の前に行っで手を合わせた

20秒や30秒くらいして、そのまま「また機会があれば」と行っでどこかへ去った

俺は体中の痛みを耐え、研究所に帰った。

そろそろ家に帰らないとなあ。
ファンクスとやらとは少し話がしたいな……

21・1月5日 <AM>

「ほっ」

アタツシケースを大理石っぽい床にダン！と落とす。

「ありきはどこにいるかなー？」

金髪で顔の整った美少女が空港を後にした。

視点：コミゾン

「博士ー、そろそろ俺寮に帰らないと……」

「おおそんな時期か」

「明日あたり帰ります」

「ふむふむ 分かった」

あ、冬休みの宿題してなかったなあ……

携帯を開く。メールが一件来ていたみたいだ。

『ありきー、帰ってきてるから空港まで出迎えよろしく』

……朝の8時！？

「博士！ 今何時です？」

「んー？ 8時47分だが？」

「いー！？ ちょ、急用です！」

空宙そらに会うのは久しぶりだなあ

「遅い！」

「すまん！」

「ったく、時間にだけはルーズなんだから」

「ほんと、スマン！メールなんて気にしないから」

「まあ、いいわ。とりあえずありきの家に連れて行きなさい

ホテルも何も用意してないから1日だけ泊めなさい」

「はあ！？」

「さあ、早く」

携帯を開く

『博士、1日早く寮に帰らせて頂きます』

「なんで帰ってきたの？」

「んー？ ちよつとね」

少し顔色が暗くなったのは気のせいだろう

「資格のほうはどうなんだ？」

「まだ取れるわけじゃないじゃない」

未成年よ」

そうか、こいつ同級生だつけ。

「背、高くなつたなあ

俺が180cmちよつとなのにお前、俺より高くないか？」

「んー……ありが低すぎるのよ」

（俺も高いほうなんだがなあ）

ありきとは空宙が俺を呼ぶときのあだ名で、

『存』という名前は呼びにくいので、という事で

『在り』にして、そこに名前っぽ

『き』をいれたというものだ。

名前っぽいつてなんだよ？ ったく

「とりあえず、1年ぶりの再会なんだから、どこか行こう」

「はいはい」

どこに連れて行こう。最近建ったばかりの『東京スカイツー』に
でも連れて行こうか

「行くぞ」

「んー」

「へー こんなのが建ってたのかー知らなかった」

「俺もはじめてきた」

「なんだそりゃ、きたかっただけか」

「それもあるな。うん」

「昔はよく遊んだね！……」

「そうだね！……」

話が続かん！

「何で帰ってきたのさ？」

まだ、医者になるは叶^{ゆめ}ってないんだろ？」

「……」

「……」

「ちょっと、お休み頂いたんだ。気休めだよ、気休め！」

「……そうか」

こいつにもいろいろあるんだしな、深くは聞かないようにしよう。

✦

「ほら！ありき！？」

「ちょ、早い！」

今日は近くで見つけた結構広い草原に行っているところだ。

「いよつと」

「はあはあ」

風が心地よい……

「ねえ、ありき？」

「ん？」

「夢とかつてあるの？」

「能力者になりたいなあ……」

「私は……医者になりたい。どんなに時間がかかっても、絶対に」

✦

「本当に行くのか？」

「絶対に、次に会うときは絶対に医者になって帰ってくる」

「……頑張れよ」

「うんっ」

空宙はその日、アメリカへと発った。医者になる勉強のために。

「何かあつたら、連絡しろよ！相談、乗ってやるから」
「うんっ……ありがと」

キ

いろんな回想が俺の中を駆け巡る。

懐かしいなあ

「ありきは？ 能力者学校行って、能力は使えるようになったの？」

「おう、レベル6だぞ。すごいだろ」

「ありきは夢が叶って、同僚ももうなんか目、つけられてるし私だけかあ」

「勉強してるんだろ？」

「うん、せめてヘアリングも出来ればすぐ医者になれるのに……」

「能力に頼るのはあんまりよくないぞ」

「だよね……」

また暗い表情になる。

「！？」

俺は思わず後ろを向いた

音、聞こえる。何だ？

「ねえ？ なんだか変な音がしない？」

「あ。ああ」

キィイイインというような凄いスピードで飛んでいるような物体が近くにある感覚。はっ！

「危ない！ 逃げるぞ」

ファングスの組織の連中かも

「手助けする」

「ナギサ！」

俺やスカイタワーに居た人たちは瞬時に地面に降りた。

俺が上を見上げると黒く、大きな物体がスカイタワーを直撃、粉砕あそこに居たら死んでいたな、確実に

さっきの人たちがキヤアキヤア行っている

「キヤア」

「宇宙？大丈夫か？」

「うん？」

あ！……鉄骨が！」

「ん？」

大きな鉄骨が落ちてきている。

「ああ、大丈夫だ<反発力>^{レプリシオン}」

俺はα、鉄骨をβにして、吹き飛ばす。

「すご……い」

「だろ？」

ナギサ、敵は？」

「ほかのメンバーが行っている。あなたは来客を逃がして」

「あ、ああ」

宇宙を巻き込んでしまったようだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596z/>

去った日常

2012年1月9日19時51分発行